
輝く理由

来戸 述

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輝く理由

【Nコード】

N3671T

【作者名】

来戸 述

【あらすじ】

自分は情性で生きている。いつしかそんなことを思うようになった。しまったヒロは、知り合いの夢を追いかける姿を見て??。

お題「水曜日」「マンガ喫茶」「国会議事堂」

今年で二十五歳になるヒロはマンガ喫茶で働くフリーターだ。朝靄の立ちこめる早朝から、野良猫すら寝静まる深夜まで、ずっと駅前のマンガ喫茶でバイトをしている。

ろくに就職活動もせずに、ただ漠然と生活費を稼ぐただけにバイトを続けているのは、それがヒロにとってやめる理由のないことだからだ。これといった趣味も、将来の夢もないヒロにとって、やめる理由がないというのは、十分続ける理由になり得た。

ヒロは大学を休学している。やめる理由がないからだ。むろん、続ける理由もないのだけれど。

人はなぜ生きているのだろう。と、最近のヒロはそんなことを考えながら毎日を過ごすことが多くなった。

マナーの悪い客に対応するときも、不景気に愚痴をこぼす店長の相手をするときも、そんな彼らを見ながら、ヒロは一人、人間が生き続ける意味について考えていた。

「ああ、そっか……死ぬ理由がないからか」

ぼそつとつぶやいたのは、バイトが休みの水曜日のことだった。特にすることもないので、ヒロは簡単な朝食を済ませた後にふらふらと街を歩いていた。立ち止まる理由がないからだ。

情性で生きている。そんな言葉がよく似合うと、ヒロは街角のシヨーウインドウに映る自分の姿を見て思った。

いつから自分はこのなふうになってしまったのだろう。日常から輝きが消え、魂の抜けた人形のようになってしまったのはいつからだっただろうか。

昔の自分は周りのご機嫌を伺い、自分の意志ではない行動をし、虚勢を張って結果を出していた。そんな時期が自分にもあった。

だがそんな自分に戻る理由もまた、ヒロにはなかった。

気の向くまま、足の向くままに歩き続けたヒロは、気がつくとも

会議事堂の前に来ていた。

そういえば、今日は何か重大な議決があるとかで、ニュースキャスターが熱を込めて語っていたっけ。

今朝方、なんとなくつけた報道番組の内容を思い出しながら、ヒロは特に立ち止まる理由もないので、そのまま歩き続けた。

国会議事堂の前ではマスコミが大臣やら議員やらを取り囲んで何やら騒いでいた。カメラのフラッシュが焚かれ、記者たちの怒声にも似た質問が飛び交っていた。

その中心に、ヒロは見知った顔を見つけた。思わず足を止めた。

「アキ……」

まだヒロが大学に通っていた頃、サークルで知り合った女性だった。

彼女は大きな腕章をつけて、ボイスレコーダーを片手に大臣を追いかけて回っていた。薄い化粧しかしていない顔を汗だくにし、頭の後ろで結んだ髪を揺らしながら、必死になって質問を繰り返していた。

あの頃と何も変わってないな……。

目を細めて、ヒロはアキの姿を眺めた。

いつも元気で明るく、みんなが幸せであればいいと思っている。

アキはそういう女性だった。

彼女がマスコミの世界に飛び込んだのも、世の中の不正を暴きたいという彼女らしい正義感からだった。

『私ね……記者になろうと思うんだ』

彼女と出会ったのは、もう何年前になるだろう。彼女の後を追いかけられずに立ち止まってから、もう何年が過ぎただろう。

ヒロはため息をついた。

別に、アキと付き合っていたとか、そういうのではない。アキは分け隔てなく他人と接したため、誰とでも仲良くなれた。ゼミでもサークルでも、彼女の姿は常に輝いていた。

自分とは、大違いだ。

ヒロは思う。自分は絶望したのだ。ヒロという人間と、アキという存在との間にある、あまりにも大きな隔たりに。決して近づくことを許さないその差に。

『違うと思うよ。ヒロはそんな人じゃない』

アキの悲しげな顔が蘇ってくる。

『私はヒロにもっとがんばってほしい。もったいないよ。やれることを全部やって、がむしゃらに努力して……あきらめるのはそれからでも遅くないと思う』

そう言う彼女は、本当に自分のことを心配してくれていた。

それなのに、自分は逃げたのだ。現実から。アキのまっすぐな瞳から。

気がつくと、すでに報道陣は国会議事堂の前から姿を消していた。大臣たちを追って建物の中に入ってしまったのだろう。アキの姿もそこにはなかった。

彼女がいる場所までは遠い。

でも、たどり着けないわけではない。

「……あきらめる理由もないよな」

ヒロは一人つぶやくと、くると背を向けて歩きだした。

明日から、また大学に行こう。きちんと就活もしよう。だって自分が輝かない理由もまた、そこにはないのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3671t/>

輝く理由

2011年10月9日00時29分発行